二〇一二年度　入学試験問題

法学部A方式Ⅱ日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

二限　国　語　(60分)

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

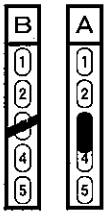
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

(一)　正しいマークの例

(二)　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ここではテクスト*生産ということを、文字どおり文学テクストの印刷、出版、流通過程のなかでとらえることにしたいと考えています。それはどういうことか。話が抽象的にならないように、いま具体的な例として三遊亭円朝の『怪談牡丹燈籠』(明治一七[一八八四]年、東京稗史出版社)を取り上げてみましょう。これは文学史的には、近代的な文学文体である「言文一致体」の先駆けとなったと言われている物語で、その点でもまず最初に取り上げるのが妥当なテクストだと思うからです。

これは幕末から明治にかけて活躍した有名な噺家、三遊亭円朝が高座で演じた怪談を、速記者の若林玵蔵と酒井昇造の二人が速記して、東京稗史出版社から中本*の形式で、全一三巻の分冊形式によって出版しました。現在その初版本を手にすることはきわめて困難ですが、そのかわり次のような三種類の形で私たちは読むことができます。ただその三種類のテクストの「本文」には微妙な違いが認められますので、まずそれぞれの冒頭の部分を紹介します。

A寛保三年の四月十一日、まだ東京を江戸と申しました頃、湯島天神の社にて聖徳太子の御祭礼を執行まして、その時大層参詣の人が出て群集雑踏を極めました。茲に本郷三丁目に藤村屋新兵衛といふ刀剣商が御座いまして、その店頭には善美商品が陳列てある所を、通行かゝりました一人のお侍ハ、年齢二十一二とも覚しく……

(筑摩書房、明治文学全集『三遊亭円朝集』昭和四〇年。東京稗史出版社の初版本を底本とする)

B寛保三年の四月十一日、まだ東京を江戸と申しました頃、湯島天神の社にて聖徳太子の御祭礼をいたしまして、その時たいそう参詣の人が出て群集雑踏を極めました。ここに本郷三丁目に藤村屋新兵衛という刀剣商がございまして、その店先にはよき商品がならべてあるところを、とおりかかりました一人のお侍は、年の頃二十一二とも覚しく……

(筑摩書房『円朝　怪談集』昭和四二年)

C寛保三年の四月十一日、まだ東京を江戸と申しました頃、湯島天神の社にて聖徳太子の御祭礼を致しまして、その時大層参詣の人が出て群集雑沓を極めました。こゝに本郷三丁目に藤村屋新兵衛といふ刀屋がございまして、その店先には良

い代物が列べてある所を、通りかゝりました一人のお侍は、年の頃二十一二とも覚しく……

（岩波文庫『怪談牡丹燈籠』昭和三五年）

較べてみれば漢字の表記がかなり違い、振り仮名の仮名づかいにも一部違いが認められます。しかし、音読すれば全て同じ文章だと分かります。つまりこの三種の文章の［　X　］は音読する声によって保証されているわけで、これは円朝が実際に口演したものを速記したのですから、もちろんそうならなければかえっておかしいと言わなければなりません。ただ、それとともに私たちは次のことを確認しておく必要があります。それは、この物語における本文はむしろルビのほうにあるということです。普通私たちは漢字かな交じり文にルビをつけた文章に接した場合、漢字かな交じり文のほうを本文として扱い、ルビはその漢字の読み方を示すために便宜的につけた、補助的なかな文字と見てしまいがちです。ところがこの物語の場合は、ルビのほうが本文であり、漢字のほうがいわばルビに相当する、宛字だったことになります。[1]

この漢字の宛字は円朝がつけたとも考えられますが、速記者の若林玵蔵と酒井昇造とが文章化する際に宛てたものと考えるほうがより実情に適っています。酒井昇造の回想「日本速記大家経歴談」（『日本速記雑誌』明治四四［一九一一］年）によりますと、彼らが文章化したものを、『郵便報知新聞』の記者に添削してもらったそうです。もしそうならば――これはきわめて重要な点だと思いますが――この文章は円朝を含めて四人が作ったことになります。その意味で私たちが目にする文章はけっして一人が作ったものではありません。

これを別な観点で見ますと、話しことばに漢字を宛てるということは、そのことばに解釈を加えることにほかなりません。Aのテクスト生産者たちは、たとえば「いたしまして」を「執行まして」と解釈し、「よきしろもの」を「善美商品」と解釈し、「ならべて」を「陳列て」と解釈しています。しかしBとCではそれぞれ違った表記をし、円朝の語りに対する理解が微妙に異なっていることを示しています。そしてこの違いから私たちは、読者の識字に関する編集者の認識を読み取ることができそうです。[2]

Aは東京稗史出版社の初版本を底本*としていて、これは明治文学の研究者にとって資料的な価値を持つように配慮したためと考えられますが、BとCとはそのことよりも、むしろ昭和三〇年代、四〇年代の読者のリテラシーを考慮した結果と思われま

す。その点から見れば、編集者が想定する読者層もまたテクスト生産にかかわっていると言うこともできます。

現在では漢字の規範的な訓み方を示す時にルビを用いることになっています。当時ももちろんそういう使い方をする場合がありましたけれども、その他にも、たとえば「言行表裏奴」というような表現が『怪談牡丹燈籠』に出てきて、これは深層的な意味を表したものと言えるかもしれません。「くちほどでもない」というのは、本人が自慢するほど実力がない場合に、その人間を軽蔑する言葉です。それに対して、言うことと行うこととが裏表の、ずるい奴だという意味の漢字熟語を宛てるのは、このテクストの文脈に即した深層の解釈に基づく、いわば[3]一回かぎりの話しことばと漢字との対応だからです。このテクストを離れて、「くちほどでもない」と「言行表裏」との結びつきを規範化してしまうことはできません。坪内逍遙の『当世書生気質』(明治一八[一八八五]年)の「はしがき」に、「英のクレイク翁アリボン翁などハ批評家の尤物株なり……学生社界の是非を批評し……」という面白いルビの使い方が見られました。批評家を「あなさがし」と読ませるのは、いかにもうまく相手の急所を衝いた言い方で、逍遙はこのルビによって批評家そのものを批評していたと見ることができます。

(亀井秀雄『明治文学史』より。文章を一部改変した)

【注】 ＊ テクスト　作品。あるいは作品の本文。
＊ 中本　美濃紙を四つ折りにした大きさの本。
＊ 底本　校訂や出版の土台となる本。

問一　空欄 X に入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　理論的枠組　　イ　同一性　　ウ　原動力　　エ　両義性　　オ　合意

問二　傍線部1「ルビのほうが本文であり、漢字のほうがいわばルビに相当する、宛字だった」とあるが、どういうことか。「円朝」という言葉を必ず使い、「ということ。」で結ぶかたちで、四十字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問三　傍線部2「この違い」とあるが、その違いがあることからどのようなことがわかると筆者は述べているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　昭和三〇年代、四〇年代の読者のリテラシーが、明治時代に比べ、相対的に下がっているということ。

イ　明治文学の研究者が、資料的な価値の高いテクストを己の認識で選択し直しているということ。

ウ　漢字に読み仮名を付すのは、読者の識字力に対する認識の裏返しにほかならないということ。

エ　速記者の若林玵蔵と酒井昇造が、三遊亭円朝の意に反し、テクストを編集し直したということ。

オ　編集者が、本を手に取る読者の読み書き能力を考慮して、テクストを再生産しているということ。

問四　傍線部3「一回かぎり」とあるが、なぜそう言えるのか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　ずるい奴だという意味の「言行表裏」に「くちほどでもない」という振り仮名を与えるのは、作者である円朝の真意を汲み取らなければできない、高度な解釈行為だから。

イ　円朝の語りは消えてゆく声に過ぎないが、そこに速記者たちの解釈が加わることで、言文一致体の先駆けと言われるにふさわしい、唯一の文学文体が生み出されたから。

ウ　「よきしろもの」に漢字を宛てる際、「善美商品」を選ぶか「良き代物」を選ぶかは、編集者の判断次第であり、そこで想定された読者層も、その時かぎりの存在であるから。

エ　「言行表裏」という漢字と「くちほどでもない」というルビは、作品の文脈があってはじめて対応し得るものであり、このテクスト以外の場では成り立たないものだから。

オ　話しことばに漢字を宛てるのは、解釈を加えることであり、「くちほどでもない」と「言行表裏」との対応は、この作品によって規範化され、以後、定着してゆくから。

問五　つぎの中から筆者の考えに合致するものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　テクストは、出版や流通の過程で、作者だけでなく編集者の意図や読者の能力に対する認識に応じて生産され、そのつど変容してゆくものである。

イ　テクストは、漢字とルビの相乗効果によって多層化されるものであり、逍遙は、それを積極的に用いることで言文一致体の道を切り開いた。

ウ　テクストは、音声である語りを、文字である漢字によって視覚化するものであり、それを工夫することではじめて、近代的な文学文体が創出される。

エ　テクストは、編集者が想定する読者層に応じて改変されることもあるが、円朝や逍遙の作品は、ルビを多用することで、作者の個性を保ち得ている。

オ　テクストは、活字となってはじめて顕在化するものであり、印刷・出版・流通という過程を経ずして、文学が市場に出されることはあり得ない。

問六　波線部「言文一致体」の先駆け」とあるが、『怪談牡丹燈籠』の後、明治二〇[一八八七]年に発表され、日本近代文学の記念碑となった言文一致体小説の作品名と作者名をつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

[作品名]　ア　舞姫　　イ　たけくらべ　　ウ　歌よみに与ふる書
　　エ　浮雲　　オ　暗夜行路

[作者名]　ア　正岡子規　　イ　二葉亭四迷　　ウ　志賀直哉
　　エ　樋口一葉　　オ　森鷗外

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

古代ギリシャ人の祭式に芸術の起源を見たジェーン・E・ハリソンは、祭式が執り行われる意味を、『金枝篇』を著した人類学者J・G・フレーザーの研究成果から次のように説明する。

原始人の二つの大きい興味は食物と子供である。フレイザー博士の名言のごとく、個人としての人間が生きていようとするなら食物を持たなくてはならぬ。彼の種族が持続しようとするなら子供を持たなくてはならぬ。（略）食物と子供とは、人間が季節を調節するための魔術祭式の実行によって何よりもまず獲得せんと求めたところであった。これが、もしわれわれの考えが正しいなら、芸術の起源がここにあるとした、あの祭式の実に礎石をなしているのである。

（『古代芸術と祭式』）

ハリソンの語ることは単純な真実である。人はたったひとりで生きるにも食物が必要である。そのためには家のなかに、いろりを備えなければならぬ。そのうえ、食物を得るために川で魚を採り、野を耕し、森で狩りをしなくてはならない。人間の身体的な欲望はわずかで単純で明解だ。なにより人は突然にひとりで生まれてきたわけではない。この単純な真実も私たち現代人は忘れがちである。

ハリソンが指摘した単純な真実を近現代人は忘れつつ、家のなかに便利な道具を集めれば、完璧な暮らしを営むことができると錯覚する。人間たちは、この錯覚をひとつひとつ加える過程で、家の内外にいたいろいろな神々の場所をひとつひとつ消し去ってきた。

文明化とは魚を採り、野を耕し、森で狩りをすることと子どもの養育の［ A ］である。したがって便利な暮らしほど本質的には個別的に自足できない生活を意味する。利便を追求すればするほど個は自立するのではなく、外への結びつきを増大

しなければならない。

あなたがもし新しい土地に住み家を得て、暮らしはじめるなら、早速に食料を手に入れなければならないだろう。水道、ガス、電気を供給し、排水を設備してもらわなければならないだろう。

食料、水道、電気、ガスが供給されなければ、現代人のあなたはその土地では暮らせない。ひとりで供給できるようにすれば、かなりの金額を要するだろう。あなたにもし子どもがあったとしたら、保育所や学校、病院が近くに必要だろう。あなた自身が病気になり、また老いていて介護が必要となれば、そうした施設も必要だろう。

子どもの遊び場やあなたが野球やテニスやゴルフのできる広場、公園もほしいだろう。あなたは新しい建物を手に入れただけでなく、じつはその住まいの周囲の環境までを手に入れているのだ。つまり住むということは［　B　］ことなのだ。

要するに、引っ越しをして新しい土地で暮らしはじめたあなたは、そのときから近隣の世話になる。とすれば、あなたは最低限のこととして、近隣の人たちにまずは挨拶をしなければならないはずだ。かつて江戸に暮らす人々は、新たに引っ越しすれば、たとえば隣り近所に「引っ越しそば」を配った。あるいは菓子折をもって近隣の人々に挨拶をしてまわった。

「引っ越しそば」はしかし、じつは近隣社会への参加の意志表明にすぎない。長屋に暮らしはじめるなら、当然、共有財産である井戸や便所の掃除を手伝わなければならなかった。そうしなければその土地で生きてゆくことができなかったからだ。その仕事をおこたれば、周囲の人々に[1]人間的な生活に不可欠な物が「奪われている*」人間と、あなたは見なされたにちがいない。井戸替えや便所掃除のほかに、あなたはともにその土地で生きるために、他にもいくつかの[2]近隣のルールに自らの身体をもってしたがわなければならない。挨拶とは、じつはそうした近隣の生活を成り立たせるルールにひとつひとつ参加する意志表明を意味している。それが江戸の人々の作法や身ぶりをつくりだしていたのである。

「引っ越しそば」は、江戸から明治、大正、昭和と時代が変わっても、つい最近まで残っていた風習である。ではなぜ消えたのかといえば、井戸替えやら共同便所の掃除をする必要もなく、あなたは引っ越しをしても、すぐに水も電気もガスも供給さ

れ、排水の設備も整えられているからである。あなたはそれを当然の権利だと思うはずである。なぜなら、住民税を払い、水や電気やガスや排水にもお金を払っているからである。

あなたはさらに近隣の店舗、病院、学校、公園などの施設を日常的に利用する。ここでもあなたは当然だと考えるはずである。なぜなら税金を払い、それぞれの施設の利用もお金によって解決しているからである。その結果、あなたは暮らすことはすべてお金で解決できると考え、隣り近所への挨拶などしなくてもよいと思い、少なくとも隣り近所への挨拶の身ぶりを失うだろう。

では逆に、あなたは税金を払ったり周囲の施設を利用できるだけの十分なお金がないとする。自分では働いて十分なお金をもっていると考えていたにもかかわらず、その土地に暮らすためには税金も高く、さまざまな施設を利用するのにも予想外のお金がかかったとする。そうしたとき、あなたはその土地から消えるほかはなくなる。

アレントは世界をひとつのテーブルにたとえた。現代はそのテーブルが消えてしまったと彼女は述べた。しかし現代は、テーブルの前の椅子に座るには、まずお金が必要であり、結局、お金をもっている人しかテーブルの前にはいられないのである。テーブルは本来、だれにでも共有のものであったが、着席料によってテーブルも立派なものがあったり、安いものがあったりする。お金のないあなたは、安いテーブルの席に座らなければならなくなる。あるいはそのテーブルさえないところを彷徨しなければならなくなる。

あなたは自分は絶対にホームレスにはならないと考えているかもしれない。でも同時に高い着席料のテーブルにも座れないとは思っているかもしれない。むしろ安いテーブルに座ることでけっこうだと思っているのかもしれない。しかし本来、テーブルにはお金による格差があるべきものなのだろうか。[3]

高い着席料を払って座るテーブルは、その席料を支払っている人だけがつくったものだろうか。そんなことはないはずである。あなたが新たに街に暮らしはじめる、その街は長い長い時間をかけて、そこに暮らしてきた人々が金をかけ、税金を払ってつくりあげてきたのだ。お金で解決できるといっても、あなたはその積み上げてきた時間と労働とお金の、ほんの一部に対

して、お金を支払っているにすぎない。

さらにいえば、その街は孤立して機能しているのだろうか。そんなことはないはずだ。その街自体もその周りにある街に支えられて機能しているはずだ。あなたは少なくとも、歩いて、交通機関を利用して周辺の街の施設も利用するだろう。自分が暮らす街には、その施設がないか、あっても少ないから、利用しようと思うだろう。それなりに税金を払い、料金を支払えば、施設利用は当然の権利だと考えるだろう。しかしその施設は、その街に暮らす人々だけの施設であって、街の人口分しか使うことができないと断わられたら、あなたはあきらめるしかないだろう。

あなたがかりに東京の中央区に住み、ひとりの子どもを育てていて、夫婦ともに働きたいと考えている。しかし保育所はいっぱいで、あなたの子どもは放課後に保育所に入ることはできない。ならば、あなたは子どもを産まなければよかったと思うかもしれないし、仕事をやめようと考えるかもしれないし、引っ越しをしたいとのぞむかもしれない。ほらほら、もうあなたは子どものことを忘れかけている。

保育所だけではないだろう。私たちは生活するために周辺環境に、周辺の人々に依存しなければならない。しかし生活を支えてくれる施設や基盤がなければ、あきらめるほかはない。

アレントは「私的」“private”とはもともと「欠如している」“privative”という観念を含んでいると説明する。もし個人が「欠如している」なら、社会の［A］が進むほど「欠如している」状況はあらわになるはずだ。しかしそのように見えないのは、[4]個人が個人の判断で、その「欠如」をあきらめることで、結果として隠されてしまっているのではないか。

現代は個人が自由を謳歌している時代に見える。しかしその自由は獲得したのではなく、個人が「欠如している」なにかをひとつひとつあきらめていった過程なのではないか。あきらめづづけで、そのあきらめすらあきらめて、自分たちが「欠如している」状況にあることすら忘れているのが、現代の私たちの姿ではないだろうか。

プライベートが「欠如している」状態であることは、観念ではなく、現代社会ではリアルである。路上で電車内で携帯電話をたえず使い、話し、メールを打ちつづけている若者たちの姿を思い浮かべれば、[5]彼らがなにかに「欠如し」、なにかを求めてい

ることはわかる。そうでなければ、あれほどメールにこだわるはずはない。とすれば、個人の暮らしを守るべき住居も、多くの人々が使うべき器であり、時代の文化と生活と人間関係であるさまざまな建築もまた「欠如している」状態で建てられていて、たえず「欠如している」状態を補おうとしているにちがいない。そして文明が進歩するほど末端にいたるまで「欠如している」状況は深刻化しているはずである。

（松山巌『住み家殺人事件』より。文章を一部改変した）

【注】＊「奪われている」　政治哲学者ハンナ・アレント（一九〇六―一九七五）の著書『人間の条件』からの引用。

問一　本文中に二箇所ある空欄 A に共通して入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　孤立化　イ　統一化　ウ　公営化　エ　民営化　オ　分業化　カ　多重化

問二　空欄 B に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　余暇を人間的にすごすための環境を手に入れる
イ　個人の自立した生活をつくるための環境を整備する
ウ　ひとりではつくることのできない環境を手に入れる
エ　近隣住民とともに独立した環境を整備する
オ　個の利便と他者の幸福とが両立する環境を創造する

問三　傍線部1「人間的な生活に不可欠な物が「奪われている」人間」とはどのような人間と考えられるか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　近隣住民の許可を得ずに共有財産を使うことで、生活に必要な環境を手に入れようとする人間。

イ　近隣社会におけるルールを拒否することで、反社会的に個人の自由を謳歌する人間。

ウ　江戸の人々の作法を蔑ろにしたために、有料で共有財産を使用する権利をなくした人間。

エ　引っ越しそばを配るなどの配慮を欠き、近隣社会から疎外されることになってしまう人間。

オ　近隣社会へ参加することの意義に気づかず、一人で不便のない暮らしができると思っている人間。

問四　傍線部2「いくつかの近隣のルールに自らの身体をもってしたがわなければならない」というのは江戸の人々の慣習を説明したものであるが、それに対し、現代人はどのようにして社会での生活を実現しているか。二十字以内にまとめて解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問五　傍線部3「テーブルにはお金による格差があるべきものなのだろうか」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人が金銭で手に入れている住まいの周辺環境は、人々がともにつくりあげているものなので、まずは近隣の人々への接し方こそが重要になるべきだから。

イ　近隣社会の公共施設は、富めるも貧しきも使うことができる共有財産としてあるものであり、納税額による利用制限自体を見直すべきだから。

ウ　人が生きてゆくために不可欠な社会環境は、多くの人々の営みの蓄積の結果であり、その利用は個人の財力によって左右されるものではないはずだから。

エ　人が失いつつある近隣社会との繋がりは、本来お金で買えるものではないので、江戸の人々の慣習を見習い、積極的な社会活動への参加が必要だから。

オ　人が自立を目指し、お金で獲得した便利な暮らしは、実は周囲の人々によって支えられているものなので、独力で生きていると奢ってはいけないから。

問六　傍線部4「個人が個人の判断で、その「欠如」をあきらめることで、結果として隠されてしまっている」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　社会とのつながりが希薄化していることを等閑視し続けた結果、個人が、人間らしい生活を築けないことに無自覚になっている状態。

イ　細分化した社会で自己利益の追求に見切りをつけた結果、個人が、知らぬ間に生きてゆくことへの漠然とした不安を抱えている状態。

ウ　金銭が介在する人間関係を築くことに気をとめなかった結果、個人が、社会との繋がりだけでなく自己の自由を忘却している状態。

エ　公共サービスを受けるときの経済力の重要性を黙殺し続けた結果、個人が、無意識に個々の利便の追求に関心を持っている状態。

オ　挨拶を通して周辺環境に身を委ねることを断念し続けた結果、個人が、気づかぬうちにそれぞれの孤独感と向き合っている状態。

問七　傍線部5「彼らがなにかに「欠如」、なにかを求めていることはわかる」とあるが、筆者は若者が何を求めていると考えているか。本文中より最も適切な部分を六字以上十字以内で抜き出し、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

問八　二重傍線部「家のなかに便利な道具を集めれば、完璧な暮らしを営むことができると錯覚する」とあるが、なぜこれが「錯覚」なのか。本文全体の内容を踏まえた説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間が便利な道具に依存する生活は、新しい道具を追求し続けることによって成立するため、完成した生活など達成し得ないから。

イ　現代の人間の便利な生活は社会に支えられているため、家の内に便利な道具を集めることだけで完結して営み得るものではないから。

ウ　便利な道具に囲まれた生活は、個人の経済力によって差が生じるため、すべての人々が幸福になれる理想的な暮らしとはほど遠いから。

エ　完全な自足を目指した便利な生活は、人間関係を蔑ろにしているため、一見豊かではあるが、満たされない部分が残り続けるから。

オ　便利な道具に支えられた現代の生活は、収入次第で変わってしまうため、いざというときに近隣の人々と助けあうことも不可欠だから。

〔三〕 つぎの文章は、藤原道長の臨終の場面を描いた一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ただ今はすべてこの世に心とまるべく見えさせ給はず〔ア〕。この立てたる御屏風の西面をあけさせ給ひて、九体の阿弥陀仏をまもらへさせ奉らせ給へり。[A] 智者も死ぬる折は、三つの愛をこそ起こすなれ。まして殿の御有様は、さまざまめ[a]でたき御事どもをおぼし放ちたるさま、後の世はたしるく見えさせ給ふ。女院・中宮をだに、今はあひ見奉らせ給ふ①事なし。おぼろけに申させ給ひてぞ、「さは」とて、ただはつかなる程にて、「はや帰らせ給ひね、はや帰らせ給ひね」とのみ申させ給ふ。すべて臨終念仏おぼし続けさせ給ふ。仏の相好*にあらずより外の色を見むとおぼしめさず。仏法の声にあらずより外の余の声を聞かんとおぼしめさず。後生の事より外の事をおぼしめさず〔イ〕。御目には[X]の相好を見奉らせ給ひ、御耳にはかう尊き[Y]をきこしめし、御心には極楽をおぼしめしやりて、御手には弥陀如来の御手の糸をひかへさせ給ひて、北枕に西向きに臥させ給へり。

十二月二日、常よりもいと苦しうせさせ給へば、女院・中宮・上*の御前も、いとゆゆしう[i]思ひ奉らせ給ひて、関白殿*にせちに申させ給へば、人々出して見奉らせ給ふに、あはれに悲しういみじうて、ほとほと御声たてさせ給ひつべし。さて帰らせ給ひぬれば、僧達近う候ひて、御念仏をして聞かせ②奉る。されど、その日おこたらせ[ii]給ひつ。この程、内・東宮より御使[B]つ。今になほ弱げにおはしませど、ただこの御念仏のおこたらせ給はぬにのみ、おはします定にてあるなり〔ウ〕。又の日も、「今や今や」と見えさせ給へれど、事なくて過ぎさせ給ひぬ。ついたち四日巳時ばかりにぞ、うせさせ給ひぬ③るやうなる。されど御胸より上は、まだ同じやうに温かにおはします〔エ〕。なほ御口動かせ給ふは、御念仏せさせ給ふと見えたり。そこらの僧涙を流して、御念仏の声惜しまず仕うまつり給ふ。臨終の折は、風火のまづ去る。かるが故に、動熱して苦多かり。善根*の人は地水まづ去るが故に、緩慢して苦しみなし〔オ〕。されば善根者と見えさせ給ふ。あはれに内・東宮の御使ぞ隙なき。日頃いみじうし[iii]のびさせ給へる殿ばら・御前達、声も惜しませ給はず。げにいみじや。

（『栄花物語』より。文章を一部省略した）

【注】
＊女院　藤原彰子。上東門院。道長の娘。
＊中宮　藤原威子。後一条天皇中宮。道長の娘。
＊相好　身体的特徴。
＊上の御前　源倫子。道長の正室。
＊関白殿　藤原頼通。道長の息子。
＊ついたち　月始め。
＊善根　来世において善果をもたらす所業。

問一　空欄 A ［　］ B ［　］ にはいずれも形容詞「いみじ」が入るが、それを正しく活用させたものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　いみじから　イ　いみじく　ウ　いみじかり　エ　いみじ
オ　いみじき　カ　いみじけれ　キ　いみじかれ

問二　傍線部i「ゆゆしう」、ii「おこたら」、iii「しのび」の本文中の意味として最も適切なものをつぎの選択肢の中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

i　「ゆゆしう」
ア　みっともない　イ　慌ただしい　ウ　恐れ多い　エ　尋常でない　オ　申し訳ない

ii　「おこたら」
ア　過ちを犯す　イ　病気が軽くなる　ウ　効き目がなくなる　エ　油断する　オ　怠ける

iii　「しのび」
ア　秘匿する　イ　懐かしむ　ウ　我慢する　エ　回想する　オ　慕う

問三　波線部①「せ」、②「せ」、③「ぬる」の文法上の意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　命令　　イ　断定　　ウ　当然　　エ　意志　　オ　推量　　カ　完了

キ　伝聞　　ク　使役　　ケ　尊敬　　コ　禁止　　サ　過去

問四　傍線部a「さまざまめでたき御事どもをおぼし放ちたるさま」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　現世での富や財産を来世に持っていくのをあきらめている様子。

イ　現世でのすぐれた名声や威徳が世間に広く知れわたっている様子。

ウ　現世での栄耀栄華をきっぱりと捨て去る気持ちになられた様子。

エ　現世での楽しい日々に対する未練をお捨てになれないでいる様子。

オ　現世での富や名声の獲得には一生を通じて全く無関心でいた様子。

問五　空欄 X ・ Y に入る語句として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　極楽　　イ　念仏　　ウ　後生　　エ　外の色

オ　弥陀如来　　カ　女院　　キ　余の声　　ク　中宮

問六　右の本文には、そこまでが引用であることを示す「とこそはあんめれ」という一節が入る。その箇所として最も適切なものを本文中の〔ア〕〜〔オ〕の中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

問七　右の本文からは、藤原道長が極楽往生をしたというように読み取れるが、極楽往生が果たされたのは、道長がどのような行いをしたためと考えられるか。「道長が」で始まり、「ため。」と結ぶかたちで二十五字以内で解答欄に記せ。ただし、句読点も一字と数える。

問八　『栄花物語』は正編と続編から成り、正編は道長没後の長元年間〔一〇二八～三七年〕頃の成立と考えられているが、それと最も成立年代の近い文学作品をつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　大和物語　　イ　紫式部日記　　ウ　土佐日記　　エ　十六夜日記　　オ　伊勢物語

〔四〕 つぎの各問いに答えよ。

問一 つぎの文中の傍線部A～Dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

先日図書館で、日本語にホンヤク[A]された英国の物語を読んだ。この本は十九世紀を代表するケッサク[B]と言われているが、私は、アイシュウ[C]漂うストーリーだけでなく、イショウ[D]を凝らした挿絵も気に入った。

問二 つぎの文中の空欄に入る漢字を選択肢ア～ソからそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A 老□心ながら、ご忠告申し上げます。

B 開店したばかりなのに、□古鳥が鳴いている。

C □輪際、彼女の頼みごとは聞かないことにした。

D 野球に関する彼の知識は無□蔵である。

E 彼が不□出の芸術家であることは間違いない。

ア 分　イ 仁　ウ 閑　エ 人　オ 現

カ 母　キ 尽　ク 根　ケ 懐　コ 世

サ 婆　シ 寒　ス 休　セ 金　ソ 枯